

『たまきはる』冒頭部再考——時間認識と回想——

今 関 敏 子

キーワード 夢 花 桜 時間の分断

要 旨

『たまきはる』は建春門院、八条院、春華門院の仕えた女房の手になる鎌倉期の自伝的作品である。

『たまきはる』には、作者が構成してひとまず完成させた本文のほかに、選択の結果本文に入れなかった草稿を後人が拾い集めた記述を奥書以降に有するという形態上の特質がある。このような作品の本文冒頭部がいかなる意味をもつのかについてはすでに論じたことがあるが、本稿では冒頭部に見出せるキーワード「夢」「桜」「花」の分析、時間認識と回想の質という観点から再論する。

時間認識の特徴は、「昔」と「今」の分断である。これは冒頭部を読み解くヒントになり得る。すなわち、「昔」の象徴としての建春門院と、「今」の春華門院の因縁を述べるといふ、作品の根幹が冒頭部には示されているのである。

一、はじめに——作品の特質と問題点

『たまきはる』に綴られるのは、一人の女性の宮廷女房としての半生である。作者は健御前。藤原定家の五歳年長の姉である。

作者の宮仕えは十二歳に始まった。最初の主人・建春門院からは多大な影響を受ける。女房としてのあり方、心構えを身につけ、充実と幸福感を味わう若き日々であった。しかし、作者二十歳の時、敬愛してやまぬ女院は三十五歳で崩御。その後八条院に出仕、その猶子であった幼い春華門院に仕えたが、春華門院もまた、病を得て、わずか十七歳で帰らぬ人となる。中世日記文学にジャンル分けされる『たまきはる』は、三人の女院に仕え、いずれの女院とも死別し、年老いて一人取り残された作者の回想記の形態をとる自伝的作品である。

自己の人生を回想して綴る平安鎌倉期の日記作品群に共通する執筆動機は、例外なく喪失である。^①とりわけ愛情の対象

を喪失した体験が圧倒的に多い。『たまきはる』の執筆動機も対象喪失と言い得る。主題は自ずと愛と死にならう。^②

ところで、この作品には、他の日記作品にはない形態上の特徴がある。作者が構成してひとまず完成させた本文と、奥書以降に、選択の結果本文に入れなかった草稿「きれぎれさんざん」を後人（定家）が拾い集めた記述を有することである。この特質は、作品をいかに読むかに常に付き纏う問題である。本文と奥書以降を通してひとつの作品とみる捉え方もある。言うまでもなく、読者としては残された作品を奥書以降も含め、そのまま無心に鑑賞すればよいのである。確かに、奥書以降も本文に劣らず——読みようによっては本文を凌駕するほど——読み応えのある内容であり、文学的感興を呼び起す。

しかし、研究する立場として注意しなければならないのは、本文は中断ではないという点である。草稿は選択され、作者の手で意図的に本文に採択され、またはずされたのである。作者は、本文を書き終えたところで完結とみなして筆を擱いたのである。この点は重要であり、充分に考慮されねばならないであろう。

たとえば、一枚の絵画が完成する過程で幾多の素描が重ねられ、それらが残っていると、まず作品は一枚の絵として鑑賞されるのである。素描には、素描としての価値があ

り、それだけで鑑賞に堪えるものも多々ある。しかし、素描がなければ、一枚の絵が完成品ではないとはみなされない。作者の創意がまずは尊重される。絵画と文学作品を同等に扱うことは出来ないにしても、『たまきはる』にも共通する要素はある。作者が筆を擱いた本文をひとつの達成とみて、奥書以降は、本文を補足するもの、本文の理解を助けるものと捉えるのが、まずは、妥当ではあるまいか。

本稿では以上のような特質のある作品の冒頭部をどう読むかを、時間認識という観点から捉えなおしてみたい。

二、冒頭部の解釈をめぐる

I 「君」は誰をさすか

『たまきはる』は、次のように始まる。

たまきはる命をあだに聞、しかど君恋ひわぶる年は
経にけり

あるかなきかの身に果てに、時の間も思ひしづめむ方
なき悲しさの、身に余りぬる果てくは、まことに忍び
もあへぬ、うつし心もなき心地のみすれど、数ふれば、
長らへにけるほども心憂し。さりとして、かゝる物思ふ時
だに、ひたすら憂き世を厭ひ離るゝ道のしるべとも、思
ひ取られんをだに、うれしかりける前の世の御契とも思

ひなさまほしけれど、月日の隔たり行くま、には、たゞ
かき乱し、言ふかひなく恋しき御面影のみ、つゆばかり
慰さむ方なし。何によそへて、おのづから思ひなぞらふ
る方もありなんと、せめて思ひまはせど、この世の色も
匂ひも、飽かずのみ嫌はしきこそ、せん方なけれ。猶弥
生の空あたりも匂ふばかりなる桜ばかりや、大方のこ
とざまにも思ひよそふれど、さしもほどなき名を分きし
御名の恨めしさにつけても、さすが思ひ捨つまじき心地
して、いたづらなるま、にながめ暮らす日数の、幾日と
だにたどられぬに、移ろふほどなき風の情なさも、見し
夢に**変はらず**。

あぢきなきその名ばかりを形見にてながむる花も
散るぞ悲しき
(252頁)

現代語訳をすれば次のようになる。

命ははかないものときいていたけれど、君を慕う心
を持って余して長い年月が経ってしまったことよ。

取るに足らない人生の終りに少しも慰めようのない悲
しさをこらえきれない身の果ては、まことに堪え難く、
全くもう生きている心地がしないけれど、数えると長生
きした年月もうとましい。それにしても、こんな風に物
思いをする時間さえも、ひたすら憂き世を離れる道しる
べ(になるのだ)とも考えられることをせめて、ありが

たい前世の契りなのだと思いい切りたいけれど、月日が隔
たるにつれ、ただ心が乱れ、言っても甲斐のない恋しい
面影ばかり(が浮んで)少しも慰められる手だてがない。
何に譬えて自然に比べるものがあるうかと、せめて思い
めぐらすが、この世の(どんな)色も匂ひも(譬えるに
は)不十分で、厭わしいばかりなのはどうしようもない。
それでも、三月の空一面に匂う桜だけ、だいたいの様子
に思いなぞらえるが、あんなにも儂い名を分けたお名前
の恨めしさにつけても、やはり思い切ることが出来ない
気がして、することがないまま、物思いにふけて(桜
を)眺める日数を幾日とも数えないうちに散る、慌しく
吹く風の無情さも、(昔)見た夢に**変らない**。

やるせないその名前ばかりを思い出のよすがにして
眺める桜も散るのがとても悲しい。

この、作品世界へ読者を誘う導入部に支配的なのは、老残
の悲しみと深い喪失感である。しかし、ここには固有名詞が
省かれている。そのために傍線部「君」「恋しき御面影」が
誰なのか、「さしもほどなき名を分きし御名の恨めしさ」「見
し夢」が何をさすのかが曖昧になる。右のように直訳的に現
代語に直しても具体的に何を述べているのかが、わかりにく
い。

まず、冒頭歌の「君恋ひわぶる」の「君」は誰をさすのか。

これを建春門院ととるか、春華門院ととるかによって、冒頭部の意味、作品理解の仕方は大きく変ってしまうのである。現状では「たまきはる……」歌も「あぢきなき……」歌も春華門院の崩御を詠んだものと捉え、冒頭部全体を春華門院追慕の記とする説が優勢である。^④

夙に玉井幸助は「君」を建春門院と解釈したが、「君」が建春門院であるのは、「約四十年間一時も忘れず建春門院を恋い侘びていたことになり、これは不自然である。」^⑤「建春門院崩御の思い出も、春華門院崩御の悲しみを通してしか回想することができなかつたのである。」^⑦という理由で排され、建春門院説は影を潜めてしまった感がある。

子 関 敏 今
しかしながら、本文のほとんどは建春門院時代の記事で占められている。春華門院の記述は本文にはきわめて少ない（本文部41頁の新日本古典文学大系で2頁余りに過ぎない）。

春華門院については、本文も終る頃、「さて、この憂き世の夢は、その御方とて、とありか、りと見定むるほどの事もなかりき。」（302頁）と書き出される。そして、「はかなき御遊びにつけてもありがたうつくしう」（302～303頁）、「この世にたくひあるべうも見えさせをはしまさざりしうつくしき」（303頁）と稀有な存在性が語られ、「尽きせぬ御面影の、片時忘れぬこそわびしけれ。」（303頁）と記述された後、追慕八首が掲げられ、本文は閉じられるのである。しかも崩御された

という直接の記述はない。春華門院を語り始めた途端に、本文が終ってしまう感がある。

春華門院の描写と作者の感慨が精彩を放つのは、むしろ奥書以降なのである。すなわち、作者自身は何らかの理由で、春華門院の記述の草稿を意図的に避けて本文には入れなかつたのだと考えられる。従って、冒頭部のみが春華門院追慕になるとは考えにくい。嘗て筆者は、「たまきはる……」歌を建春門院、「あぢきなき……」歌は春華門院であると論じた^⑧が、本稿ではやや角度を変えて冒頭部を再考したい。

II 天折と老残

建春門院説を否定する根拠として、崩御から執筆時点までの月日の隔たりが挙げられるが、それについて一言触れておきたい。

人は確かに過去のことを忘れていく。しかし、人は、出来事を古い順に忘却するわけではない。自己の人生にとって意味のあることは年月を経ても記憶している。意味のないことはすぐ前のことでも忘れてしまう。遠い過去の建春門院時代が熱意を持って記述されるのは、それが作者にとって価値のあることだからである。建春門院のような存在にはその後の長い人生で二度と出会うことはなかった。一人の人間の存在性はかけがえがないのである。だからこそ喪失感は深い。

冒頭部の「花」「桜」(■部)、「夢」(□部)の譬えは、夭折にこそふさわしいと言えるだろう。

これらが作品中にいかに使われているかをみよう。各々の語例数と対象を表に示す(表I)。

夢(冒頭部1 本文10 奥書以降6)

夢の用例は、本文と奥書以降で明確に異なる傾向を示す。

本文の用例はそのほとんどが比喻であるが、奥書以降の用例はいずれも睡眠時にみる夢をさす(睡眠時の夢の記述例は本文に1件。奥書以降に3件)。本文和歌の中にも睡眠時の夢をさすと思われる用例はあるが、後に触れるように、比喻にも重なる。六十年の人生は「六十路の夢」(254頁)、春華門院の存在は「この憂き世の夢」(302頁)と記される。

桜(冒頭部1 本文1)

「桜」は奥書以降には用例がない。また、春華門院に対しては本文でも語例が皆無である。ここでは服飾に関する「桜」は省くが、その用例数は、「桜尽くし」を含め、14例。これは後白河院五十御賀の記事に集中している。五十御賀に女房たちの装束が詳述されるのは、それが建春門院時代の華やかさを象徴するからである。

花(冒頭部1 本文5 奥書以降1)

「花」は冒頭、建春門院崩御、両女院の追慕歌に集中している。

春華門院に春の花の用例が多いのは、まさしく院号に符合するからであろう。奥書以降の用例もまた、春華門院の崩御を示す1首「積もる雪にしほ(を)れぞまさる草木も散りにし花の匂ひならねば」(315頁)である。

キーワードとしての「夢」「桜」「花」

表Iから、「夢」「桜」「花」には法則性があることが知られよう。すなわち、これらの語は、建春門院と春華門院の崩御をめぐって頻出するキーワードなのである。そして、いずれも本文では比喩的に使われており、その場面がきわめて限られている、という特質を指摘できる。注目したいのは、次の2点である。

(1)「夢」と「花」は、建春門院および春華門院の追慕歌群に集中する。

(2)「夢」「桜」「花」の語例が揃うのは、冒頭と建春門院崩御のみである。

II 「夢」「花」と追慕歌群

「夢」「花」の語例が集中する追慕歌群をみよう。論じていく便宜上、和歌に通し番号を付す。

《健春門院追慕歌》5首 夢2(40%) 花1(20%)

1 思ひ出づるわが心とてうつゝ、かは初めも果ても知らぬかげろふ

- 2 面影の見し人数は忘れねど語るは**夢**に変はらざりけり
- 3 過ぎにしも今ゆくすゑも寝るが中のはかなき**夢**よいつか
覚むべき
- 4 思へどもあるかなきかの世中に今日までいかながらふる
身ぞ
- 5 惜しみかね昔も今も散る**花**や憂き世をいとふ道のしるべ
は (5は後に示す建春門院崩御の記述に重なる。「昔も今も」
は3「過ぎにしも今ゆくすゑも」に重なる。) (293頁)
- 6 **花**の色も月の光もあかざりしこの世ならでもさやにほふ
覧
- 7 恋しさのしばし忘るゝ時もなき憂き世の**夢**はいつか覚む
べき
- 8 かぎりなき面影ばかりとゞめおきていかなる道の姿なら
ん
- 9 **花**の散り露の消ゆるもほどぞある**夢**にまどひし曙の空
- 10 白玉の袖よりほかに乱れにし**夢**にまどひて消えなましか
ば
- 11 **夢**にだにさだかに見えぬ会ふ事を寝るがうちとて待つぞ
はかなき
- 12 春の**花**散りにし空にあふげども光も知らぬ月日なりけり

13 たれもみなはかなき世とは嘆くともためしも知らぬ我思ひ
かな (303〜304頁)

(7は本文「尽きせぬ御面影の、片時忘れぬこそわびしけれ。」(303頁)に意が近い。7「憂き世の夢」は「さて、この憂き世の夢は、その御方とて、とありか、りと見定むるほどの事もなかりき。」(302頁)に重なる。「夢」の用例のうち、10と11は睡眠時にみた夢が比喩的に使われている。10の「白玉の袖よりほかに乱れにし夢」は、奥書以降に具体的に記載される、抱いていた春華門院が白玉と砕け散った夢である。)

以上のように、追慕歌群については、「夢」「花」の語例だけをみれば春華門院が多い。歌数に対する割合は(一)に示した。いずれにせよ、語例だけでは、冒頭部の対象を具体的に特定は出来ない。

冒頭部と追慕歌群の照応をみよう。冒頭部の類似箇所と追慕歌の通し番号を示す(表II)。

冒頭部*印の「恋しき御面影」「見し夢」は、既に指摘したように、具体的に何をさしているのかがわかりにくい表現である。従って、建春門院、春華門院どちらにも照応が考え得る。しかし、これらを除けば、「憂き世を厭ひ離るゝ道のしるべ」まではすべて建春門院追慕歌に、後半は春華門院追慕歌に照応する傾向が見出せる。冒頭部に語られるのは、どちらか一人ということではなく、二人の女院なのであるま

いか。

冒頭部	追慕歌番号
あるかなきかの身の果て 果てく	1
うつし心もなき心地のみすれど	1
長らへにけるほども心憂し	4
憂き世を厭ひ離る、道のしるべ	5
*恋しき御面影	2、7、8
この世の色も匂ひも、飽かずのみ嫌はしき	6
*見し夢	2、3、7
ながむる花も散るぞ悲しき	12

表II

追慕歌には、建春門院、春華門院とも「夢」「花」という共通の語が選択されているという点で表現が類似している。従って、建春門院の追慕の歌は、必ずしも崩御後すぐに詠まれたのではなく、両女院とも同じ執筆時点から回想されていると考えられる。歌稿があったにしても、作品を成す際に、加筆修正し、編集されているであろう。

二人の相違が明らかなのは、時間の距離である。建春門院に対しては、女院の死から我が身の生きてきた長い時間——

3 「過ぎにしも今ゆくすゑも」 4 「今日までいかながらふ

る身ぞ」5 「昔も今も」——に眼差しが移る傾向がある。対して春華門院の場合は、「7いつか覚むべき」「12光も知らぬ月日なりけり」にとどまり、崩御から時間的な距離が短い。これはいずれの女院も執筆時に回想されているからである。執筆時点からみれば、建春門院は遠い過去、春華門院はきわめて近い過去である。

「夢」と「花」は、執筆時点における作者の意味づけと時間認識を示唆する。二人の女院が自己にとっていかなる存在であったか、建春門院と春華門院の関連性は何なのかを把握してこそ、二人の女院は詩的に表出されるのである。

III 「夢」「桜」「花」と建春門院崩御

「夢」「桜」「花」の語例を含む建春門院崩御は、次のように書かれている。

やがて、その年の七月、**花**の散るやうなりし**夢**のはかなさに、**桜**ばかり、昔も今も恨めしく、さすが形見なる色も匂ひもなかりけり。(288～289頁)

安元二年は、華やかな春と悲しみの秋が対照的な年であった。春の後白河法皇五十賀の盛儀の記事は紙幅を費やし、女房たちの贅を尽した衣裳が詳述される。とりわけ桜にまつわる衣裳の晴れやかさが表出されている。同じ年の秋、建春門院崩御。恰も桜が散るような夢のように儂い女院の死であつ

た。

「昔も今も」(傍線部)は、萩原が指摘するように、「昔」が建春門院崩御、「今」が春華門院崩御であろう。また、「昔も今も」は、建春門院追慕歌「5惜しみかね昔も今も散る花や憂き世をいとふ道のしるべは(293頁)」に照応する。

そもそも「夢」「桜」「花」そのものに時間認識が内包されているのを看過できない。いずれも儂さ、短さという時間の比喩であり、美しい夭折の女院方——昔の建春門院、今の春華門院——を象徴するのである。

夙に玉井が指摘したように、「夢」「桜」「花」がすべて揃うのが、冒頭と、この建春門院崩御の記事であることに鑑みれば、冒頭部にまったく建春門院の存在が投影されていないとは、考えにくい。さらに、既に述べたように建春門院、春華門院に対する追慕歌は、各々冒頭部前半と後半に照応する。冒頭部は、建春門院追慕に始まり、春華門院追慕に終ると推測される。

四、時間認識の対比・分断

I 昔語り

本文は、昔語りの姿勢で、建春門院を回想し叙述される。冒頭部に続けて執筆動機が述べられている。

明け暮れぬとばかり、またおなじ世に長らふと聞くたぐひの、わづかに残りたるも、昔見し人の、おのづから言問ふもなし。六十路の夢は時の間の心地すれど、思ひつづくればさも言ふかひなく思出でなき身の、さすが幼しとも言ふべかりけるほどより、宮仕へとかや、人のよからず言ひ古しめたる事を、朽葉が下に隠れ果てたらんをだに、取る方ならずなり初めにける身を思へば、さまざま移り変はる世のありさま、人の心もたゞ我世ばかりに、昔今けぢめしるかに変はり果てにけるかなと思ふに、いまさらよしなき古事さへ思ひ出でられて、つゞきもなぐ言ふかひなき昔物語を、つれづれなるまゝに言ひ出づれば、片端をだにその世を見ぬ人は、さすがに聞かまほしうするもありけり。古めかしかりし人々は、「今やうの、珍しく見慣らはぬ」とのみ言ひしかど、今はそれも、限りなく古代なる昔語りになりけり。

建春門院と申しは、世々を隔てたる古事にて、御名などおぼめく人も多からんかし。(254頁)

ここにもまた、冒頭と同様に、他者と過去を共有できぬ老残の悲しみ・孤立感(太線部)が示される。それでも、昔を知らない人と接点はないわけではない。「うるさく人の聞かまほしくすれば、おぼえぬことゝもの、四十年過ぎにしを書きつくれど(289頁)」という記述もあるように、知らない昔

を知ろうとする人はいるのである（波線部）。「世々を隔てたる古事」である建春門院について述べることは「限りなく古代なる昔語り」であった。

ここにはまた、時間認識も示されている。とりわけ顕著なのは隔世感（点線部）である。「昔今けぢめしるかに」は、新日本古典文学大系の脚注に、「違いがはつきりと。平家全盛期と鎌倉幕府成立後の近時とを対比したもの。」とある。奥書き以降にも世の変わりように触れている箇所がある。

人の心も引き換へ、神世の初めなど聞く心地して、あらぬ様に珍しくのみ聞こゆるにつけて、昔の御事は、いとど跡もなき心地して、人知れずあはれなる事も、おなじ心なる人、たれかは交しらむ。

(310頁)

確かに源平合戦を挟む時代の変換期に作者は生きた。しかし、それは書く素材に選ばれてはいない。また、父俊成の九十賀も描かれてはいない。書く素材として作者が選択したのは、宮廷女房としての人生である。奥書き以降の引用部も、建春門院亡き後に世は大きく変った、という文脈である。『たまきはる』の場合、時間を対比、分断させる要因は、直接的には源平の争乱を挟んだ歴史の変革期ではない。建春門院崩御という人生の転機であるように思われる。世の移り変わりを認識する契機は建春門院時代である。「昔」は建春門院時代である。既に述べたように、「昔も今も」は、具体的

に建春門院崩御と春華門院崩御をさす。従って「昔今けぢめしるかに」は、源平の合戦をめぐる世の変遷ではなく、それも含めた建春門院の存在していた時期と今という時間の分断であろうと思われる。

Ⅱ昔と今

一般に、時間は線形に直進するものとして捉えられる。しかし、『たまきはる』作品内の時間把握の特徴は、時間が過去から現在へ、さらに未来へと均等に滞りなく直進するのではなく、過去と現在が、隔てられている、という点にある。すなわち、時間は過去から現在へ不断なく連続するのではなく、作品世界では、過去と現在が対比分断される傾向が強いのである。

「昔」の用例は、本文、奥書き以降を併せ19例見出せるが、「昔」をさす時期は、建春門院宮仕え時代に集中・固定化する傾向をみせる。「昔」が建春門院出仕時代に集中する限り、時間は、均等に流れず、「今」と「昔」が対比・分断する傾向をもつのは当然であろう。

このような「昔」の固定的な傾向は、作者の時間認識の独自性を示すものである。建春門院の存在した「昔」を知る人のない悲しみ、過去を共有できない孤独が、「昔」の用例には付き纏うのも特徴的である。

一方、「昔」が春華門院出仕時期とその崩御を示す例は皆無である。執筆時点より数年（長くとも十年前後）前に終った春華門院出仕時代は、四十年も前の建春門院時代に比すれば、きわめて近い過去になる。「今」は、15例の用例があるが、執筆時点を示すものが圧倒的に多い。回想する「今」、語る「今」である。春華門院の思い出は、未だ「昔」にはなり得ない、むしろ限りなく「今」に近いのである。従って冒頭歌「君」は、「年は経にけり」という表現に鑑みるならば、建春門院ではないかと思われる。

このような時間の分断は、『たまきはる』とほぼ同時代の自伝的家集『建礼門院右京大夫集』に共通する時間認識である。右京大夫の恋人平資盛は若くして戦死した。右京大夫の場合には、人生の転機が歴史の転換期に重なったのである。取り残された深い喪失感が作品が執筆する動機となる。そして、作品では源平の争乱、平家滅亡、資盛の死を境に、価値ある「昔」と回想の「今」に時間が分断する。作品世界の時間流れは流れず、また積み重ならず、「存在」と「不在」、「昔」と「今」に隔てられるのである¹⁵。

さらに留意したいのは、『たまきはる』奥書以降には、「昔」と「今」を対比させた表現がないことである。また、執筆時点を示す「今」の用例も皆無である。この点は重要であろう。時間認識という点でも、本文には統合性がある。昔と今を分

断して把握する語りの姿勢は一貫しているのである。

五、おわりに

「昔」と「今」の分断は、冒頭部を読み解くヒントになり得る。すなわち、昔の象徴としての建春門院と、今の春華門院の因縁を述べるといふ、作品の根幹が冒頭部には示されているのである。遙か昔のことであるが、建春門院のような人物との出会い、そのような存在との関係性はその後の人生で二度となかった。そして今、春華門院崩御という夢のような悲しみが覚めやらない。

四十年程以前の建春門院と十年程の春華門院各々の存在と死には時間差があり、悲哀の質も異なるのだが、春華門院崩御は、女房としての人生を振り返るとき、建春門院崩御の意味を新たに考えさせるのであった。奇しくも春の花を院号に持たれた若い女院。「桜」「花」というキーワードは、両女院の存在の意味を浮彫りにし、昔と今を対比させ、女房としての自己の存在意義を認識させるのである。

作品本文は、建春門院の存在とその崩御を語り、春華門院との邂逅を書いて、最終歌「たれもみなはかなき世とは嘆くともためしも知らぬ我思ひかな」——自己の思いの深さは特別なのだといふ、孤独感・孤立感——をもって終る。このよ

う本文の構成と冒頭部は相似型なのではあるまいか。夙に論じたごとく、冒頭歌の「君」は建春門院、冒頭部最後の「あぢきなき……」歌は春華門院追慕の歌と考える。冒頭部は建春門院追慕の歌に始まり、春華門院を悼む歌で括られ、ましまりのある一節となっている。

固有名詞を避け、比喻を通して愛と美と死が表現されていることは、本文に春華門院の記事が少ないことと無関係ではあるまい。意識的に本文に選択しなかつた背景^⑧は重要であり、さらに考察されねばならないだろう。いずれにしても、本文執筆時点では春華門院はすっかり過去にはなっていない。出来事ではなく、出来事から時間が経ち、回想が熟成しないと、意味づけが深まらず、構成の確かな作品にはなり難いのである。

固有名詞と比喻を具体的に補って冒頭部を具体的に現代語訳すれば次の意になろう。

命ははかないものときいていたけれど、(折に触れては亡き)建春門院を慕う心を持って余して長い年月が経ってしまったことよ。

取るに足らない人生の終わりに少しも慰めようのない悲しさをこらえきれない身の果てはまことに堪え難く、まったくもう生きていく心地がしないけれど、数えると長生きした年月もうとましい。それにしても、こんな風

に物思いをする時間さえも、ひたすら憂き世を離れる道しるべ(になるのだ)とも考えられることをせめて、ありがたい前世の契りなのだと思いつきたいけれど、月日が隔たるにつれ、ただ心が乱れ、言っても甲斐のない建春門院の恋しい面影ばかり(が浮んで)少しも慰められる手だてがない。何に譬えて自然に比べるものがあるのかと、せめて思いめぐらすが、この世の(どんな)色も匂いも(譬えるには)不十分で、厭わしいばかりなのはどうしようもない。それでも、三月の空一面に匂う桜(そして、桜の意の院号をもつ春華門院)だけ、だいたいの様子に思いなぞらえるが、あんなにも儂い名(春の院号に桜を示す春の花)を分けたお名前の恨めしさにつけても、(春華門院の崩御を)やはり思い切ることが出来ない気がして、することがないまま、物思いにふけて(桜を)眺める日数を幾日とも数えないうちに散る、慌しく吹く風の無情さ(春華門院の早過ぎる崩御)も、(昔)見た夢(のような建春門院崩御)に変らない。

やるせないその名前ばかりを思い出のよすがにして眺める桜も散る(奇しくも院号を分けられた春華門院を建春門院の思い出のよすがにしてお育て申し上げたのに、花のように散ってしまう)のがとても悲しい。

建春門院をお慕い申し上げて何と長い年月を経てしまったことか。女院のすばらしさになぞらえるものはこの世にはないが、敢えて譬えるなら、美しい桜。それにつけても奇しくも春の花を示す名を分かちもたれた春華門院まで崩御された悲しさは、あの夢のような建春門院崩御の悲しさと変らないのであった。

冒頭部には、喪失感と老残の無念が象徴的に表出され、本文の真髓が凝縮し、浮彫りにされているのである。作品構成の確かさ、完結性をも冒頭部は示していよう。

(教授 日本文学)

注

- ① 今関敏子『中世女流日記文学論考』日記文学論第二章「日記文学における回想と虚構——建礼門院右京大夫集」を中心に「和泉書院一九八七」
- ② ①の拙著、作品論第二章たまきはる第二節主題——冒頭部と桜のイメージ
- ③ 引用頁数は新日本古典文学大系『とはすがたり・たまきはる』(岩波書店 三角洋一校注)による。
- ④ 福田秀一『建春門院中納言日記覚書』(武蔵野大学人文学会雑誌一九七二・三)、荻原さかえ『『たまきはる』の日記文学性』(駒沢国文一九七二・五)、大矢はる恵『健御前日記』の主題について(解釈一九七三・二)等。③の脚注には、「君」は春華門院。一説に建春門院。」とある。
- ⑤ 日本古典全書『健寿御前日記』(朝日新聞社一九五四)頭注に

「建春門院をしのび参らせて筆を起す。文中に「さしもほどなき色をわかし御名」とあるので、後に奉仕した春華門院をしのびての起筆かとも疑はれるが、さうではなく、建春という御名を、春の花なる桜の色を分かし御名といったのであろう。後の四〇段にも建春門院をしのびて、桜ばかり昔も今もうらめしくと書いてゐる」とあるのに筆者は賛同する。

⑥

④の大矢論文。

⑦

④の荻原論文。

⑧

たとえば藤川功和「健御前の言説——『たまきはる』成立の階梯——」(国語と国文学第964号二〇〇四・三)は、『明月記』『玉蕊』等の記述を比較して歴史背景を考察した上で、春華門院御悩の記事が本文にないのは、定家に伝えないという意図があったと結論付けている。

⑨

②に同じ。

⑩

「おなじ春なりしにや、建春門院、内裏におはしまして(中略)いふかひなくめでたく、若くもおはします」(国歌大観番号3 詞書・新潮古典文学集成『建礼門院右京大夫集』糸賀きみ江校注)

⑪

④の荻原論文。

⑫

⑤に同じ。

⑬

今関敏子『建礼門院右京大夫集』における夢—象徴と比喩—川村学園女子大学研究紀要第15巻第2号 二〇〇四・三

⑭

⑧を参照。

⑮

①の拙著、日記文学論第二章「日記文学における回想と虚構——建礼門院右京大夫集」を中心に——で回想の熟成の重要さを論じた。